

2014年10月14日～22日までに開催されたミャンマースタディーツアーに参加した。ゼミ生都築くんの卒業論文の研究のための企業訪問や、それ以外にも農村訪問、JICA、JETRO訪問、日本語学校、NLDへの訪問など、様々な分野、立場からミャンマーという国を見ることが出来るツアーであった。途中二日間ほど体調不良で参加できず、全日参加とはならなかったが、実に中身の濃い経験をできたと思う。今回は、ツアーの日程順に振り返り、感じたことをまとめたい。

#### 一日目 香港トランジット、ヤンゴン国際空港到着

香港でのトランジットの時間が7時間近くあるということで、空港を飛び出し、香港の街を散策した。空港を出るなり、香港の街並みを見て感じたことは、とにかく同じような高層ビルがずらりとならんで、都心はブランドショップが立ち並び、アジアとは思えないほどに西欧近代化されていると印象を受けた。そして、空気がPM2.5の影響でとにかく悪い。空気全体が濁っていて、小一時間外を歩いただけで、喉と目が痛くなった。こんな空気の悪い所でよく中国や香港の人々は生活しているなど思った。たった7時間の滞在であったが、香港での生活が既に嫌になるくらい空気の汚れている街だった。ところで、この香港での一番の目的というか、目玉のアクティビティは、香港でまさに起こっていた民主化デモの様子を見に行くことである。香港の中心街を占拠する形で、そのデモは行われていた。学生たちが道路にテントを張って路上生活し、道路一体を占拠している状態だった。しかしその有様は、過激というよりはどこか落ち着いており、普通に学校の勉強をしている学生もちらほら見えた。少し奥の方に行くと、デモ隊と警察官がにらみ合っている光景を見た。デモ隊の人たちは、武器も持たずに、道路に座り込み、警察はじーと仁王立ちして列をなしていた。その日には、特別大きな騒動も起こらず、ちょっとつまらなかったのだが、私たちが香港を離れた数日後に、警察との衝突があったとの知らせを聞いたそのあとには、少しぞっとした。このデモの有様を見て、確かに街を占拠して、国民や世界に注目を浴びたかもしれないが、じゃあこれで何が変えられるのかと考えると、正直疑問ではあった。結局こんなことをしても、中国政府はびくともしないのが現状ではないだろうか。

香港を離れ、深夜にミャンマーヤンゴン市に着いた。空港は今までカンボジア、タイ、フィリピンなどの東南アジアの国を訪れてきたが、その中でも群を抜いて簡素で小さい国際空港であった。セキュリティも非常に甘く、もちろんエボラ出血熱への水際対策などがされている訳もなく、いつこの国にエボラ出血熱が入ってきてもおかしくないなど思った。そしてさくら観光にホテルまで送ってもらい、その日は終了。

## 2 日目 NLD、SMBC 訪問

午前中 NLD を訪問し、トップ 2 のウー・ティン・ウーさんのお話を伺うことができた。ティン・ウーさんは 80 歳を超える年齢にも関わらず、パワフルで話し始めたら止まらない、そして頭のめちやくちやキレル、そんなお方であった。ティン・ウーさんのお話の中で印象に残ったことは、今ミャンマーに必要なのは、「liberty」「democracy」「rule of law」の三つだとおっしゃっていたことで、これは後のツアーで色んな人から聞いた話から考えても、ミャンマーに必要な全てを表していると感じた。また、民主化はゆっくりと時間をかけて育てていかなければならないとおっしゃっていて、彼のその知見の広さと、洞察力は目を見張るもので、ただただ圧倒された訪問であった。NLD を支えている人物はまさしく彼以外の他にはいないであろうなと思った。もし仮に NLD が政権を取った場合、彼の力が多分に発揮されるのであろうが、(ティン・ウーさんが、若者がスマホばかりをいじって、スマートだと皮肉っていたように) 彼が亡くなった後に誰が NLD を力強く引っ張っていくのだろうか。NLD の次世代、これからを担う若者の教育が今後の NLD、ミャンマーという国の未来を大きく左右するであろうなと感じた。NLD は「優れたリーダーがいるところは、周りが育たない」という状況なのかなと思った。

午後からは SMBC に訪問した。場所は多くの日本企業が集まるさくらタワーという所にあり、日本人駐在員は森さんという方 1 人で、他ミャンマー駐在員が数人体制で運営されていた。森さんからは、現在の日本企業の進出状況や近隣他国と比較したミャンマーの状況をご教授頂いた。なかでも印象的だったお話は、カンボジアが「ミャンマーリスク」と呼び、ミャンマーの経済成長を懸念していることである。カンボジアはタイ、ベトナムのサプライチェーンとしての経済発展を描いているが、地政学的にミャンマーにもその機能が今後期待されているため、ミャンマーがカンボジアの競合となるかもしれやない。そのほかにも、森さんにはミャンマーについて幅広く情報を提供していただいた。

## 3 日目 JETRO、JICA 訪問

この日の午前中は JETRO に訪問した。瀬川さんという入社 5 年目で研修でヤンゴンに来ている方にお話を伺った。瀬川さんのお話で印象に残ったことは、外国人は土地を買う権利を持ってないということ、加えて経済制裁を受けていた時代に中国が不動産開発に積極的に進出したせいで、不動産の価格がダブルスタンダードとなり、高値で日本人の駐在員のみなさんが部屋を借りていることである。瀬川さんの場合、月 24 万円で借りており、しかも一年契約で初回に一括払いのため、とても会社が負担してくれなければ生活できないという状況であった。ヤンゴンに来て 3 か月ということだったが、知識が豊富な方で、日本企業の進出における課題などを知ることができた。

午後は再びさくらタワーに戻り、JICA に訪問した。印象に残った話は、教育制度における問題点についてで、高校卒業と大学入学を兼ねた共通試験により、大学が振り分けられるため、それが医学部の学生の不足にも繋がっていると伺った。また各省庁がそれぞれの

該当する専門分野についての教育方針を考えており、かつそれは専門性の低い軍人が担っておるため、大学のレベルが上がらないという話も聞いた。やはり未だ政府の役人は大半が軍人であり、民主化されていないことの弊害を感じたお話であった。

#### 4日目 ティンミャンマーランゲージセンター、高校訪問

午前中は神戸大学出身のティン・エイ・エイコさんが運営するティンミャンマーランゲージセンターにお邪魔した。エイコさんはミャンマー人の日本語教育はもちろん、日本への留学に力を入れている方で、様々な留学先、就職先が日本にあることを知った。大事なことは「つなぐこと」でこれから日本とミャンマーが経済や文化の面で交流が密になっていった際に、活躍する人材を育てること、そのために日本とミャンマーを繋ぐことが自分の役目であり、大切にしていることであるとおっしゃっていた。ティンミャンマーランゲージセンターは、日本で言う予備校というような印象で、「使える日本語」を習得するというより、「受験のための勉強」という印象を受けた。そのため、日本語能力試験に受かるための教材はかなり充実している印象を受けた。しかし、私の経験から考えると語学というのは、使えて初めて語学であって、試験のための勉強には、習得能力に限界があるように感じた。結局語学は使えるようになって初めて、飛躍的に成績も上がるのではないだろうか。受験のためだけに勉強するより、使える語学のために勉強するほうが、実は受験合格への近道だと思う。

午後からはエイコさんの紹介で、小中高隣接している公立学校に訪問した。建物はぼろく、理科の実験器具もないという教育環境としては非常に貧しいものであった。印象的だったのは、教師のほとんどが女性であったということ。ミャンマーの女性はまじめで働き者であることを象徴していた。学生の印象は、皆大人しい。周りの顔色を伺い、積極的に手を挙げないのは、日本と似た部分であるなど感じた。しかし、私がこれまで東南アジアの若者に感じた、社会を牽引してやろうというバイタリティ、熱意を持つような学生は見かけず、ミャンマー社会の問題に対する関心もさほど高くないように感じたので、この先の将来のミャンマーを担う人材が、教育制度の面から見ても、若者の漂わせる雰囲気から見ても、果たして育っていくのかどうかという疑問が残った。

#### 5日目 農村訪問

MYANDHHRA 代表かつバプティストの神父さんでもある、ジャ・ムーさんの協力で、ヤンゴン市内を飛び出し、農村訪問をした。訪れた場所は、バプティストの宣教師を育てる宗教学校で、男女年齢を問わず、様々な学生がいた。彼らも前日の高校訪問の時と同様で、物静かで、大人しいという印象を受けた。生徒のみなさんから歌を歌ってもらい、そのあと生徒が作ってくれたご飯をごちそうになった。彼ら生徒はほとんどが遠く離れた地方の出身で、寮に住み込み、自炊しながら学校で勉強しているのだそう。そのあとは、伝統織物を作っている工場とショップに行った。ショップで商品と値段を見せてもらい、販

売店はこの一店舗だけであると聞いて、とてもビジネスが成り立っているのかどうか疑問であった。近所の人々以外、誰が買いに来るのであろうか。その後、近くにミャンマー人と結婚して近くで暮らしている日本人の女性がいるということを知り、急ぎよ訪問した。金子さんという方で、現地で暮らし始めて3年近くになると言っていた。金子さんには現地の深刻な農業の問題について教えてもらった。現地では農薬を使って作物を育てることが当たり前になっており、そのおかげで農地は荒れ果て、作物が栽培できない状態になってきているのだそうで、金子さんはそのような状況の中、有機農業を地域で実践し、周りに広めていく活動を今後なさっていくという話を聞いた。もう一つ印象的だったのが、彼女の日本語能力が思った以上に低下していたことに驚いたことである。たった数年間言語を使わないだけで、母国語でもあれだけ能力が下がってしまうことを考えると、自分の英語能力も毎日英語を勉強し続けなければ、下がっていく一方だなと感じた。最後に訪問したのはジャ・ムーさんのコミュニティーファームで、彼の有機農業とトレーニングセンター設立への今後の計画について伺った。同時に息子さんの有機農法の実験場ともなっていた。ジャ・ムーさんと似た取り組みをフィリピンで行うジャンジャンさんがやっていたことを思い出し、ジャンジャンさんを紹介すると約束し、農場を離れた。そしてその日の夜からである。体調がおかしくなったのは、卯野さんが先に帰国するというので、シャン料理のレストランで晩御飯を食べた。そこで焼酎を飲んでから、身体の様子がおかしくなり、発熱と頭痛が襲った。その日は、水分を取りつつ、帰った直後にすぐに寝た。

## 6日目、7日目 体調不良

朝起きてから、体中が重く、激しい頭痛、手足のしびれ、発熱、悪寒を伴った。初めは二日酔いと思い、寝たら治るだろうと思いつつ、ツアーには参加せず、ホテルで休むことにした。しかし、一向に体調は良くなり、悪化する一方であった。そのままその日は寝続けたが、どうしても良ならず、 Dengue 熱の恐れもあったため、急ぎよ救急病院に夜9時ころに向かった。先生に電話をして、病院に確認をとってもらい、タクシーで病院へと向かった。しかし、病院が思ったより遠い。どんどん体力を奪われながら病院に到着した。到着した病院は「Victoria Hospital」という病院で、後から分かったことではあるが、ヤンゴンで一番の病院であったようだ。入ってすぐに、私は看護師と医者に出迎えられ、症状を説明した。ベッドに横たわり、まずは医者による問診、触診を受けた。そのあと、 Dengue 熱等の蚊を媒体とした感染症の有無を確認するため、血液検査を行い、座薬で熱を下げた。すると血液検査の結果は、 Dengue 熱等の蚊を媒体とした感染症ではなく、食物等による何らかの感染症であることが判明した。そこで入院せず、ホテルに帰ってよいとの医者の許可をもらい、薬をもらいホテルに戻った。翌日も無論体調は優れなかったので、ホテルで休み、ひたすら薬を飲んで寝た。この日もツアーには参加できなかった。この体験から感じたことを以下整理したい。

## 治療費の高さ

血液検査料と、医師の診断料、薬代を合わせて 110US ドルもかかった。現地の公務員の月給は平均 70 ドルで、とても現地の人たちが払える金額ではなかった。実際に、私が訪れた病院も、一番の医療設備を備えているにもかかわらず、その日の救急病院の患者は私一人で、他に患者の姿は見なかった。それはおそらくこのバカ高い医療費がゆえに、病院にそもそも皆来ないのであろうと感じた。ミャンマーは医療水準の低さが問題とされているが、医療費や保険の問題も深刻なのではないかと感じた。

### 藤岡ゼミの皆の温かさ

病人になった時ほど、周りの人の有難みが分かるものである。先生を初め、スタディーツアー参加者の都築、松村、保田には本当に助けてもらった。自分は普段からろくな事をしていない、失礼なことばかりしている人間にも関わらず、皆は私を心配してくれ、気遣い、支えてくれた。具体的に何をしてくれたから嬉しかったというより、皆が心配し「大丈夫か？何か欲しいものはないか？」と気遣うこの一言が一番嬉しかったし、励みになった。もし仮に私が一人の状況で病気になったとき、おそらく私は覚えようのない不安と孤独にかかっていたように思う。改めてこのゼミにいてよかったなと思った瞬間であった。皆への感謝と同時に、自分自身を振り返る良い機会になったように思う。私は自分の卒業研究において「互いが互いを助け合い、必要とするコミュニティが必要である」と考えているのにも関わらず、実生活でそれを意識し、行動できていたかと考えた時に、私はまだまだ独りよがりになってしまったり、至らない点が多いなと思った。しかし一方で、この体験で他者とのつながり、コミュニティを持つことは人間が生きていくうえで不可欠なことであると確信した。なぜなら、おそらくどんなに医療設備が整っていたとしても、周りの人の支えが無ければ、私は言いようのない不安に駆られていたと思うからである。「病は気から」とよく言うが、その「気」は、他者との関係により変化するものであると思う。

### 8 日目 富士古河、双日、ヤンゴン経済大学訪問

最終日は、なんとか体調を回復することができた。午前中にまず、富士古河を訪問した。富士古河は日系企業の進出の際の電機・機械設備を行う会社である。印象に残った話は、ミャンマーにおける中国の影響である。ミャンマーには安価で壊れやすい中国製品が出回っており、品質の良くて高価な日本製品よりも、中国製品が選ばれてしまう状況にあるという。例えば見積書をミャンマー人顧客に見せた場合、安価であるが壊れやすい加減な中国人業者の方が選ばれてしまうのが現状であるようだ。町中の電機製品はほとんど中国製ばかりで、その環境を好む人が、多数派の中で質の良い製品を売りにしている日本企業の苦戦具合を知ることができた。

その後昼食をとり、一流ホテルに事務所を構える双日株式会社に訪問した。印象に残った話は、ミャンマーへの大型投資が比較的少ないといわれているが、それは日本とミャンマーの間で租税契約がされていないことから、実はシンガポール経由の投資額が結構あると

ということである。無論、日本からミャンマーへの投資額には反映されないが、シンガポール経由の日本からの投資はあり、それが日本からミャンマーへの投資額が少ない理由の一つでもあるようだ。

最後に帰国間際に訪問したのは、ヤンゴン経済大学である。ヤンゴン経済大学の政策学部の学生とのディスカッションであった。同世代の若者とのディスカッションかと思えば、もうすでに社会人として日系企業や政府で働かれている学生ばかりであった。印象にのこったことは、先生がミャンマーの「自由」について質問した際に、中央政府に勤める学生が、ミャンマーの市場経済は既に自由である。と回答したことであった。しかし、外国企業から見れば、土地の売買権がない、参入手続きが面倒である点など、自由と程遠い状況であるが、中央政府の人たちは現状をさほど悪くは捉えておらず、そのギャップに驚いた。おそらく彼女たちはミャンマーより外の世界を知らないため、このようなギャップが生まれたのではないのだろうか。しかし、大学で講義で必ず資本主義経済について学んでいるはずなのであるが、なぜこのようなギャップが生まれるのかは疑問に残るところである。しかし、彼女たちの英語の発音は本当にひどかった。ミヤングリッシュというものらしいが、はるかにフィリピン人のなまりよりもひどいモノであった。ミャンマー人は比較的英語の使える国として東南アジアの中で位置づけられているが、フィリピンやインドのようにコールセンターなどの英語を使った事業により経済を成長させるという方法は、ほぼ不可能であろう。

## 最後に

今回のスタディーツアーはたくさんのトラブルがおこった旅であったが、非常に充実した日々を過ごすことができた。旅を通じてミャンマーに対して感じたことは、「ミャンマー」という国は、まず「民主化」を実現し、経済の透明性を確保して、初めて経済発展のスタートラインに立てるのではないのか。しかし、それまでの道のりが程遠く10年以上も先のことになっていくのではないかと思う。そう考えたときに、いざ経済発展をする際に、人材が育っておかなければならない。私はミャンマーの10年後、20年後を見据え、正しく国を引っ張っていく人材を育てるために、教育を充実させることが一番重要であると思った。しかしそれも結局軍事政権であることが、専門性を欠如させ、あしかせになっているので、私はいち早くミャンマーは民主化されるべきであると思う。総じて感じたことは、ミャンマーの民主化、経済発展には、立ち足る課題が山積みであるということだった。今後、ミャンマーは劇的に変化していくであろうが、どのように変化をしていくのか、そしてその変化はどこのだれが影響しているものなのかをここ日本から、これからも見届けていけたらと思う。